

## 指導に直結した評価を

— ポートフォリオ評価の重要性 —



長野県東筑摩郡坂北村立坂北小学校教頭

池上 幸治

## 一 評価は何のために

「目標に準拠した評価」の実施にあたっては、評価規準（基準）設定のあり方をはじめ、評価方法や評価の信頼性の問題、通知票の形式や記載のあり方等、いくつもの課題がある。しかしここでは、主として授業実践に関わって私がいだいている懸念について述べてみたい。

一つは、授業が固定化されたものになってしまっているのではないか、という懸念である。授業において、目標や到達度ばかりが問題になると、「一時間の授業のどの段階で、何を、どのように評価するか」が意識の中心となる。必然的に、予定外の学習者の反応は横に置かれ、あらかじめ計画したとおりに学習と評価が進められていくような授業が行われることになりはしないか。展開計画や評

価計画のきちんとした授業を否定するものではないが、学習者の学びよりも評価の方が主となってしまつような授業を警戒する。

それに関連して二つ目は、授業中に評価を記録していると授業が進まないのではないか、という懸念である。個人個人が追究する時間に、「〜という叙述にサイドラインを引くこと」ができたか否かくらいは座席表などに即座に書き込めるであらう。しかし、全体で話し合っている最中に、必要なことを板書しながら、それをさらにカルテに書き込んだり、発言に対する反応をメモしたりしていたら、授業のリズムは停滞してしまつだろう。

三つ目は、自己評価に用いる◎○△が大きく取り上げられてくるのではないか、という懸念である。多くの実践者が感じておられることだと思うが、もともと◎○△のつけ方には学習者による個人差が大きく、記号の示す中味は曖昧である。自己評価・個人内評価の重視が、そのような曖昧なものの使用でよしとされることを危惧する。

以上三つの懸念は、いずれも「評価が何のためになされるものなのか」という点に結び付く。

教育評価は、教育目標の達成を目指す授業において、学習者がどのように目標を達成しつつあるかを把握し、

その支援に役立てるとともに、授業そのものの改善を図る営みである。（注一）

評価は、学習者のためにするものであり、わたしたちの指導に生きるものでなければ意味がないのである。したがって、先にあげた三つの懸念は、いずれも「指導のための評価」であるべきものが「評価のための評価」になりはしないか、という危惧である。

## 二 ポートフォリオ評価のよみ

このような懸念に対して、解決の一つの方向を示しているのがポートフォリオ評価である。これは、学習の過程や結果に関するさまざまな情報を収集・蓄積して評価の材料として生かす評価方法で、総合的な学習の評価で取り上げられることが多い。この評価方法には、次のような利点があるといわれる。（注二）

●教師から見れば、子どもの学習過程や結果についてより客観的に評価する情報として活用でき、具体的な事実で子どもの変容を読み取ることができる。またそこから、その後の指導の方針や手だてを考えることができる。

●子どもから見れば、自己の学習状況や結果、変容を把握し、その後の学習に生かしていくための振り返りの

材料となる。また、相互評価の材料とし、友達のよさや変容を具体的に実感することができる。

●保護者から見れば、蓄積されている作品や記録などからわが子の成長や変容を具体的に理解することができる。また、それらを材料にしながら教師と保護者が話し合ったり共通理解したりすることができる。

以下、「椋鳩十日記」を用いた学習を例に、国語科におけるポートフォリオ評価の重要性について述べてみたい。

## 三 国語科におけるポートフォリオ評価

— 「椋鳩十日記」を用いた学習を例に—

△単元名▽ 一番心に残った椋鳩十作品を紹介しよう

△学習材▽ 「大造じいさんとガン」（共同学習材）

「月の輪グマ」「金色の足あと」

「片耳の大シカ」等の椋鳩十作品

△目標▽

◎物語を読むための「目のつけどころ」を活用して、登場人物の心情などを読み取る。

◎複数の作品を読んで、物語のおもしろさにふれる。

◎一番心に残った作品のよさを、他者にわかりやすく紹介する。

## △評価規準▽

〔関心・意欲・態度〕

○「**椋鳩十文庫**」や学校図書館などを進んで利用し、**作品の読書**や一番心に残った作品を紹介する学習を楽しんでいる。

〔能力／知識・理解・技能〕

○登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読んでいる。

○自分のとらえた作品のよさが伝わるように組み立てを工夫しながら紹介している。

## △評価の工夫▽

○全員にノートを配布し、授業中の記録、授業の感想、資料等、本学習に関係するすべての情報を記録させる。Ⅱ「**椋鳩十日記**」。このノートを丁寧に読んで評価するとともに、個に応じた支援を構想する。また、学習者に、自己の学習を振り返る資料とさせる。

## △単元展開▽ ー略ー

## △学習と評価の実際▽

「大造じいさんとガン」を読んで感想を書き、発表し合って話題を決める。(第一次・一、二時間目)

は前みたいに残雪を殺そうとはしなかった。多分、大造じいさんは残雪がむねの辺りをくれないにそめてまでハヤブサと戦ってくれているのを見て、残雪を殺すのをやめたと思う。(中略)「ただの鳥に對しているような気がしませんでした。」から、残雪を鳥ではなく、同じ生き物として見ているような気がした。大造じいさんとガンのとても心温まるお話だった。(N)

これらの感想を読み、朱書きし、コメントを書く。Nさんの場合は、「大造じいさんが変容すること」と「作品の心」に関する感想を書いていることがわかる。

次に、次ページのようにこれらの感想を整理する。そうすると、だれがどの点に気づいたかが一目瞭然となり、一人ひとりの評価ができる。そして同時に、二時間目以降の授業の構想が浮かんでくる。

二時間目は、感想をどんどん発表させ、教師側で整理しながら模造紙に書いていくなかで、読み深めていくための話題を設定する。

日ごろ発言の少ない、Aさん、Yさんが情景描写に気づいているのでぜひ発言させたい。

Yさんの読み誤り(大造じいさんの年齢)は、時の設定を確認するきっかけにしたい。

この学習における「評価の基準」は、次の二点から勘案して決めた。

◇「大造じいさんとガン」の作品研究

◇本単元に至るまでに学習してきた、物語を読むときの「目のつけどころ」

○以下のような点に関して感想をもつことができる。

- ・設定①「いつ・どこ」
- ・設定②「だれ」登場人物、主人公
- ・大造じいさんが変容すること

・話者の視点

・構造、あらすじ

・情景描写や擬声語

・作品の心(主題)

さて、「大造じいさんとガン」を読んだ後に、早速「**椋鳩十日記**」に感想を書かせる。(二時間目)

学習後、「**椋鳩十日記**」を集めて読む。例えば次のような感想が書かれた。

私は前半を読んで、最初大造じいさんは、あんまり良い人ではないと思っていた。でも後半の残雪が大造じいさんのガンを助けた場面から、大造じいさん

K君、S君の素直な疑問「なんで大造じいさんはガンをつかまえるのか」、N君の「ひきょうなやり方」のとりえ方については、人物設定に関わって「狩人」とは何かを考えさせるきっかけにしたい。等々

さて、二時間目の学習では全員が発言し、読み深めていくための話題が次のように決まった。

- |            |            |        |
|------------|------------|--------|
| 1 設定       | 2 主人公      | 変容する人物 |
| 3 話者の視点    | 4 構造、あらすじ  |        |
| 5 情景描写や擬声語 | 6 作品の心(主題) |        |

そして、ここでも授業後の感想を「**椋鳩十日記**」に書かせる。それによって、友達のことをどう受け止めたかの評価が可能になる。

例えば、前掲のNさんは次のように感想を書いた。

ここから、友達から学んで、新たに「情景描写」や「設定」に目を開けているNさんの姿が浮かんでくる。

「目に浮かぶような」表現を見つけたAさん、「目に浮かぶ」という言い方がとてもよかった。「なんでガンをつかまえるのか」疑問を持ったS君など、たくさんのお考えがでてきました。私はさっそくS君の疑問について考えてみたくなりました。これからの学習が楽しみです。

#### 四 指導―評価―指導―評価……のサイクルで

以上、実践のごく一部を例にして、「棕鳩十日記」を用いた、指導―評価―指導―評価……というサイクルの一端を紹介した。

この日記には、一時間一時間の授業の感想のほかに、次のようなものが貼られたり、書き記されたりしている。

・友達の感想のコピー（印刷）

・棕鳩十の紹介資料

・課題に対する自分の考え、友達の意見や教師の板書

・一番心に残った作品のよさ（個人追究）

・紹介のための原稿

・紹介に対して友達が書いてくれた感想カード

・単元全体を振り返って書いた感想等

教師はこの日記を毎日読み、記録することで、学習者一人ひとりの学習状況、意識、変容などを把握し、評価し、次の授業に生かしていくことができる。さらに、次々に増えていく記述やプリントは、学んできた足跡として学習者の心を豊かにし、また意欲を支えてもくれる。冒頭にあげた三つの懸念（固定化された授業の問題、評価の時間の問題、自己評価・個人内評価の問題）は、このようなポートフォリオ評価を取り入れることで解消することができるように思われる。評価は、指導に生き

#### 1 設定

- ① 大造じいさんは七十二歳なのに、腰一つ曲がっていないことがすごい。（Y）
- ② なんで大造じいさんはガンをつかまえるのか。（K、S）
- ③ 登場人物は、大造じいさんとガンの群れと残雪とハヤブサ、時の設定は三十五、六年前、場所の設定は沼地。（T、A）
- ④ 「ひきょうなやり方」はこれまでの策略を後悔している。（N）

#### 2 主人公、変容する人物

- ① 残雪は頭が良く仲間思いで頭領らしくてすごい。（H、……）
- ② じゅうをかたにあて残雪をねらったのに、下ろしてしまったところがよかった。（H、M、S、K）
- ③ 最初は良い人ではないと思ったが、後半は大造じいさんは前みたいに残雪を殺そうとは思なかった。傷ついた残雪のけがを治してあげたから本当は優しい人だ。（N、I）

#### 3 話者の視点

- ① 三人称限定視点だと思う。（M、S、I、K）

#### 4 構造、あらすじ

- ① うなぎ釣り針など、大造じいさんがガンをつかまえようといろいろな策略をしていたところが楽しかった。（M、R）

#### 5 情景描写や擬声語

- ① 音の表現がいくつもあってその場面の様子がよく分かる。（T、A、O）
- ② 「東の空が真っ赤に燃えて」「羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。」「らんまんとさいたスモソの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。」等の表現が目には浮かぶようで気に入った。（A、Y、H）

#### 6 作品の心（主題）

- ① 「残雪の目には、人間もハヤブサありませんでした。」の場面が心に残った。（M）
- ② 「ただの鳥に対してのような気がしませんでした。」のところに感動した。（N）
- ③ 最後の「おうい、ガンの英ゆうよ。～」に感動した。（M……）

てこそ、学習者の成長に役立ってこそ、その価値を発揮する。「目標に準拠した評価」への転換には多くの課題が山積しているが、さまざまな情報にとまどってしまいがちな今、「指導に直結した評価」という原点を、もう一度確認しておきたい。

（注1）『国語教育辞典』日本国語教育学会編

朝倉書店 三三〇ページ

（注2）『小学校新絶対評価の手引』教育改革研究会編

明治図書出版 七六ページ